

10回目の9.11メモリアルを迎えて (主宰者挨拶)

今日で10年。全くよそごとではなかった。戦禍の歴史の全重量がかかっているように思われた。人生を自分の意思とは全く関わりなく奪われるなどということが、どうして起きていいものか。21世紀がこんな形で始まるなんて！何とかしなければ、いやしっかり考えなければ。生命と生活という、私たち一人一人にとって最も大切なものが奪われないために何かを、と余り働いているとは言い難い頭を叩いた。

1年目に、『9.11メモリアル』を開いた。自分の詩の朗読だけだった。2年目以後は試行錯誤の連続。というのも、三年目に向かっていったとき、「直に風化しますよ。」と私に話した若い舞台俳優の言葉に、少なからず動揺したからだ。忘れてはならない、しかし忘れられる……。では一体どうしたらいいのだ。

こうして、一本筋が通ったとはお世辞にも言えないへっぴり腰で、「風化」への抵抗を試みた。したがって、企画にも運営にも、反省すべき迷いごとが沢山ある。にもかかわらず、辛抱強くこの会を支えてくださった方々があり、演奏家があり、詩人があったから、今日まで続けてこれた。今振り返ると、そのことをとても有り難く思う。

今回、第三部に「恒久平和」という言葉を用いた能舞がある。

「恒久平和」。この言葉で真っ先に私の頭に浮かぶ人物は、ドイツの大哲学者カントだ。彼が71歳になって著した『永遠平和のために』(1795・6年)は、常備軍の全廃など諸々の本質的な提言を行い、国際連合の構想にまで及んでいる。平和に対する大変な情熱。カントは、平和に向かって努力することを、全人類、あらゆる人間に期待した。

第10回目の「9.11メモリアル」に至って、私はハッキリと、恒久平和に向かう人類の一員でありたいと思った。そのことの自覚が、今日を支えている。

本日は、3月11日にわが国を襲った東日本太平洋沖大震災から、丁度半年に当たる日である。未だに行方不明の方々も数多く、未曾有の規模の災害であったことで、私たちは自分たちの生活の仕方や考え方に大きな反省と変更を迫られている。しかも、原発事故だ。経済や社会、文明のあり方まで問われ、世界に大衝撃を与えた。

第二部の「独立論壇」(シンポジウム)は、9.11だけでなく、3.11が突きつけている問題に立ち向かって論じたい。文明、科学技術、社会等々両者に共通する問題は数々あって、教育についても考えることになると思う。論者(パネリスト)共通の認識としては、特に若い世代との交流を重視したい。若い人の問題提起や疑問を受けとめたいと願っている。

思うに、追悼と哀悼の気持ち無くして平和への思念も、理想もない。平和は観念の遊びでもなく、政争の道具でもない。犠牲になられた方々に思いをいたすことが、人間社会と平和への出発点ではないかと強く思う。

東京の高円寺における日本からの哀悼の気持ちが、どうか天に届きますように！皆さまと平和の尊さを語り合えますように！

本日は、ご来場、本当に有り難うございます。(和久内明)

プログラム

- ◇ 主宰者から 和久内明
- ◇ 黙祷

第一部

- 証の墓標 劇的対話詩 (詩) 和久内明
 - ☆ すずろいの風 秋元史人
 - ☆ かぶらやの光 和久内明
 - ☆ クリスタルボール演奏 クリスタル デュオ ブレイズ

佐々木里江 山内恵

第二部

- 独立論壇 『9.11、3.11と人間の思想』

論者：岩佐茂 大屋定晴 草川剛人 ジグラー・ポール
司会：和久内明

第三部

- 哀悼の大鼓 大倉正之助
- 能舞とギターと朗読による
ルークス パーキス アエテルナ「恒久平和の光」

【能舞】 津村禮次郎
【ギター】 山口亮志
【朗読】 秋元史人
【詩】 和久内明

(能面) 三日月 (能舞装束) 能装束+ matohu

・構成 和久内明
・照明 徳丸康基

【解説】

第一部

花鳥風月と抒情。詩がその性質を大切にすることに異論はない。しかし、それだけでは詩の領分を語り尽くすことはできない。学校教育国語科で教わる詩の分類には、全く当てはまらない表現世界があって、その可能性は今なお幅広いのだ。日本人に海外詩が分かりにくいのは固定観念が行き渡っているからだろう。劇的対話詩なるジャンルはない。しかし、テロとの関わりで行われるメモリアルのために、この詩形を創造した。「風の精」と「光の精」が何をどう語り合うか。銀河系の歴史から生命の誕生、9.11及び3.11に及ぶ生命賛歌と平和世界への訴え。これは、犠牲者への祈りの対話詩である。